

古記録「壊山物語」に基づく享保5年土石流災害の記録の抽出と地域防災学習への適用

九州大学工学部 学生会員 藤本ひかる 九州大学工学研究院 西山浩司 広城吉成
うきは市役所 井浦憲剛

1. はじめに

福岡県うきは市耳納山山麓では、過去に多くの土石流災害が発生していることが、いくつかの文献で記録されている。現在も多くの場所がハザードマップ上で土砂災害警戒区域に指定されており、土石流の危険性が高い地域である。しかし、この地域では65年以上目立った豪雨災害が記録されていないことから、うきは市耳納山山麓の10地区を対象としてアンケートを実施し、地域住民が過去の災害についてどの程度認識があるかを調査した。その結果、耳納山山麓で過去に多くの土石流災害が発生していたことを知らない人は約4割だった。また、年代別の結果では若い世代ほど知らない人が多く、この地域でも住民の中で災害の記憶が風化していることが懸念される。

災害から身を守るためには、地域住民が過去にどんな災害が起こったかを理解し、自分の住んでいる地域の災害のリスクを理解する必要がある。しかし、過去の災害の記録は古記録などに眠っており、地域住民がその情報を得ることは難しい。そこで本研究では、うきは市耳納山山麓を対象として、古記録「壊山物語」(壊山:くえやま)から享保5年(1720年)の土石流災害記録を抽出し、その特徴を明らかにすることを目的とする。また、その知見に基づいて、地域の土石流災害のリスクや避難に関する災害学習会を実施したので報告する。

2. 壊山物語について

壊山物語は、著者(不明)が耳納山山麓の村々を巡り調査した、享保5年(1720年)の土石流災害の被害状況を記録した古記録である。西から東に向かって、耳納山山麓の村々の被害状況が記されており、約30箇所まで土石流被害があったことが記録されている。特に被害の大きかった地域は現在のうきは市に該当し、被害状況だけでなく、被害に遭った当時の人々の悲話も記されている。本研究では、これを現代語訳し、当時の土石流災害の様子や被害状況を調査した。

3. 壊山物語に記載されている享保5年の土石流災害

壊山物語には土石流災害の記録が30箇所あることがわかった。その推定位置を現在も残る地名に基づいて比定した結果、壊山物語記載の300年前の地名がそのまま残されていることがわかり、災害地区の比定は容易であった。そこで、現在公開されている土石流警戒区域・特別警戒区域と対応させた(図1)。その図から過去に災害が起きた場所は、今現在も土砂災害警戒区域に指定されており、災害のリスクが高いことがわかる。

享保5年の土石流災害で、特に被害が大きかった地区が屋形村、安富村、延寿寺村(いずれも現在のうきは市)であり、合わせて約50名の方が亡くなっている。また、土石流被害の記述では、「約500m四方には、石や砂、材木が倒れていた。(屋形村)」「大木が全て根こそぎ抜けていた。(安富村)」など、石や砂だけでなく流木による被害もあったと考えられる。また、耳納連山の西側では、「山の7分目に堤が築かれ、その堤防が崩れ、岩石が水と共に流れ込んできた。(富本村・徳間村・竹野村)」とあるように、溪流部に天然ダムが一時的に形成されて、それが決壊したことを物語っており、現在の災害にも繋がる記述である。

壊山物語には、土石流の記述だけでなく、被害を受けた人々の悲話も記録されている。屋形村では、家族を亡くした男が泣き叫んでいる姿、安富村では、女性が流されながら首のない子を介抱し続けている姿が記載されている。また、「死体はほとんど誰が誰だかわからなかった。」や、「数十日後五体がズタズタになった死体が発見された。」等、人々の悲しみや被害の悲惨さが生々しく記録されている。他の古記録等には被害状況などの事実が述べられているが、壊山物語は人々の様子まで踏み込んだ記述があることが特徴である。



背景：福岡県土砂災害警戒区域等マップ(<http://www.sabomap.jp/fukuoka/>)

図1 享保5年に起こった十石流災害の推定位置

4. 地域の防災学習への活用

これまでに得られた享保5年の災害記録を活用して、うきは市冠地区の住民を対象に防災学習会を実施した。過去の災害記録だけでなく、冠地区の土石流の警戒区域・特別警戒区域、ため池、地質、避難経路・場所等について、住民と意見交換を行った。

意見交換の中で、壊山物語に記載されている谷の名前が現在も残っていることが確認できた。壊山物語の冠村（現在の冠地区）の記述には、「その奥の猿ヶ口谷、数多くの小石が落ちてきて、大きな山崩れが起こった。村中を打ち破り、大量の砂石が積もり埋まり、多くの田畑が破損した。」とある。現在もこの猿ヶ口谷という地名が伝わっている（図 2）。その山頂にあるテレビ塔で、昭和 57 年に山崩れが発生し、その下側に現在も土砂が溜まっており、今後豪雨が発生した際に土砂が流れ出すことが住民の間でも心配されている。また、現在もハザードマップの特別警戒区域に指定されていることから、災害の危険性が高い場所と考える。以上の学習会を通して、地域で共有されている情報を過去の災害記録、現在のハザードマップと照らし合わせることで、地域住民の災害リスクの理解に繋がったと考えられる。

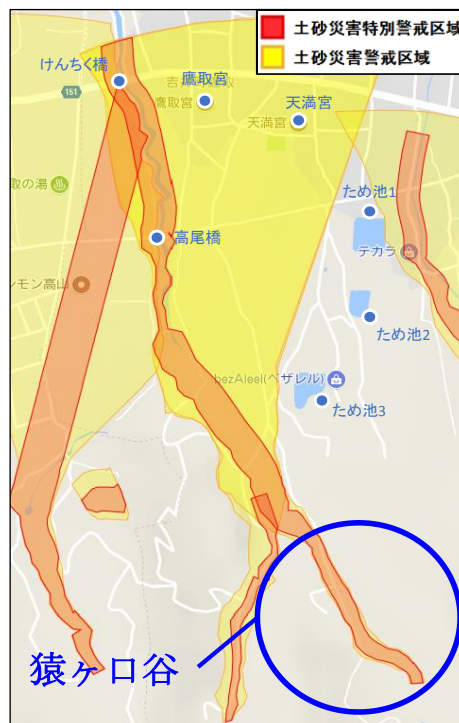


図 2 うきは市冠地区の享保 5 年
土石流発生場所（古文書記載の猿ヶ口谷と現在の土砂災害警戒区域）

5. 今後の取り組み

うきは市耳納山山麓地域は、平成 29 年 7 月九州北部豪雨で大きな被害があった朝倉市の南側に位置する。もし、耳納山山麓でも今回のような豪雨が発生した場合、大きな土石流災害が起こる危険性がある。しかしながら、アンケート調査の結果、多くの地域住民は過去の災害記憶が風化していた。今後も、本研究で得られた壊山物語の享保 5 年の土石流災害記録を活用して、該当地区の防災学習会を継続実施する。さらに、地域住民が過去の災害を知り、現在の災害のリスクを認識する機会を容易に得られるように、また、将来の災害に向けての防災意識の向上に繋げることができるように、過去の災害記録をインターネット上に公開する予定である。